



〒892-0841 鹿児島市照国町13-42 カトリック鹿児島司教区 電話099(226)5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行人 末吉卓也 1部60円年間〒共1100円

道標 04年10月10日～05年10月29日 「聖体の年」 【教区目標】 教会の教えを 学び直しましよう

1月18日～25日 キリスト教一致祈祷週間 鹿児島市内一致祈祷集会 日時 1月23日(日) 14時～16時 場所 カトリック谷山教会

【05年頭教書】

教会をつくる聖体・聖体をつくる司祭

鹿児島教区司教 糸 永 真 一

鹿児島教区の皆さん、新年明けましておめでとうございます。この新しい年が教区の皆さんにとって主キリストに結ばれた恵み豊かな年でありますように。



一 司教区 昇格五十周年

今年二〇〇五年は鹿児島教区が司教区に昇格して五十年になる記念の年です。すなわち一九五五年(昭和三十年)二月二十五日、時の教皇ピオ十二世は、「鹿児島使徒座知牧区を司教区に昇格して鹿児島司教区と名付け、これを治めるべく教区司祭に委ねる」と、教皇権をもって荘厳に宣言されたのです。わたしは教皇のこの決定を主なる神からのご意思とし贈り物として感謝のうちに記念し、皆さんとともに祝いたいと思います。

二 「聖体の年」に 合わせて

世界の教会は今、教皇ヨハネ・パウロ二世のご決定により、昨年十月から今年十月まで「聖体の年」を過ごしています。聖体の記念は教区五十周年の記念に花と実を添えるものとなるでしょう。なぜなら、「聖体は教会をつくり、教会を生かす力」であるからです。そこで、わたしたちは心と思いを一つにして聖体へ

の信仰と愛を深め、個人的な信心もさることながら、共同体の祭りとして主日のミサを大切にし、主とともにみんな御父に賛美と感謝を捧げ、いのちの糧を分かち合っ一つになるよう努めましょう。

三 聖体と司祭

主キリストは最後の晩餐において聖体を教会に残されたとき、叙階の秘跡を定めて聖体をつくる奉仕的祭

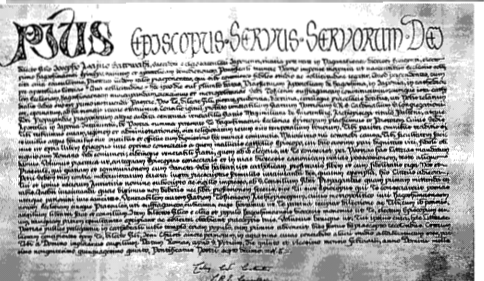
四 教区司祭の役割

先に引用した教皇のことばにあったように、鹿児島教区の統治は教区司祭に委ねられています。言うまで

司職をお立てになりました。司祭なくして聖体なく、聖体なくして教会はないのです。そして、教会はすべての人のための救いの秘跡です。

五 終りに、教区の皆さんの上に、主なる神からの恵みと平和がありますように！

わたしたちは今、教区司祭の召命を待ち望んでいます。五十年前、鹿児島司教区を教区司祭の手に委ねられた主なる神は、必ずや必要な司祭を恵んでくださることを信じて疑いません。希望をもって祈り続けましょう。



鹿児島使徒座知牧区を司教区に昇格させることを記した教皇ピオ12世の書簡

西暦2005年

恵みの年・司教区昇格50周年

平成17年

鹿児島教区司祭団

司教 糸永真一 司教総代理 竹山 昭

鹿児島地区

小隈憲士(始良)、牧山田一(指宿)、小川靖忠(加世田)、泉 浩二(鴨池)、永山幸弘、末吉卓也(ザビエル)、J・ムイベルガ、有馬信茂、頭島 光、大松正弘(谷山)、G・サンタマリア(玉里)、小平卓保(紫原)、橋口啓悟(吉野)、O・ベルナルディーノ(種子島)、国原武志(国分)、松森孝郎(マリア山荘)、竹山 昭(教区本部)、L・レデスマ(純心聖母会鹿児島修道院) 下村 徹(静養)、田辺 徹、成相明人(引退)、浜崎真実(出向)

大隅地区

M・ヴィゴロ、F・レナト(鹿屋)、東研(大根占)、郡山健次郎(志布志)、田原 章(垂水)

北薩地区

W・フリチエル(出水)、山口重義(阿久根)、M・アッシュヤー(入来)、J・レヒナ(大口)、J・ハンマ(川内)

大島地区

大野和夫(地区長館)、浜田盛茂(大笠利)、寝占敦之(瀬留)、美島春雄(大熊)、中野裕明(名瀬聖心)、木村敏彦(小宿)、西本仁史(古仁屋)、道向 進、柳本繁春、内野洋平(古田町)、岡俊郎(カトリック長浜研修所)

徳之島地区

福岡英雄、石田 望(母間)、T・メニッヒ(和泊)

司祭評議会

糸永真一(会長)、竹山 昭(副会長)、小川靖忠(事務局長)、木村敏彦、永山幸弘、郡山健次郎、泉 浩二、頭島光、大松正弘、西本仁史、M・ヴィゴロ

「彼に合う助けける者」

聖書の人間理解 (4)

竹山 昭

「彼に合う助けける者を造ろう」

神は人を「神にかたどって創造された」と述べている。聖書は、すぐに「男と女に創造された」と続けて(創一・27)、男も女も共に神の似姿であり、神に応答すべき者として平等であることを示していた。

二・4から始まる第二の創造物語では、さらに踏み込んで「人が独りであるのは良くない。彼に合う助けける者を造ろう」(二・18)と述べる。まず土の塵から造ったあらゆる生き物を連れてきたが、その中には「彼に合う助けける者」は見出せない。そこで人を眠らせ、そのあばら骨の一部を抜き取って、その骨から女を造られた。

「独りであるのは良くない」の「良くない」という「目的に合わない」というほどの意味である。人には「私」(独り)としてではなく「私たち」へと向かう歩みこそ完成への道程となるということであろう。「彼に合う助け手」とは、単なる助手や介護者にとどまるまい。直訳すれば「彼(つまり人)に向かい合う、救う者」という表現だからである。

大島力氏が指摘するように、詩編一二・1にわたれる「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか」の「助け」すなわち

「救い」と、女について言われる「助け手」は同じ言葉である。「あえて言えばここには男女の平等性と応答関係が示唆されている。しかも、その『女性』の存在は『救う者』とされている」(大島)。神は女性を男性のヘルパーとしてではなく、人と向かい合う助け手、「パートナー」として造り、互いに助け合う存在としたのである。

女が男のあばら骨から造られたことに男女の序列を見る必要はない。「助け手」になれなかった他の生き物が「土の塵から」造られたのに比べて、「男のあばら骨から」とは同じ材料から造られていることを示している。現代人なら、さしずめ、「同じ本質のもの」と表現するにちがいない。

「二人は一体となる」
「人」も「男」も「女」も普通名詞であれば、これは男というものと、女というものの、詰まりは人間というもののありようを述べている。人間は独りではなく、共に助け合って歩むことにより「神の似姿」として完成へと向かう。とはいえず、この箇所では、人間がともに歩む典型的な形として結婚を考えていることも明らかである。人間社会で人が共に歩むかたち、共同体の源は、いつの時代にも家庭にあることを思えば、人が他の人との関係性の中に置か

れていることの原点を結婚に見るのは当然であろう。互いに「合う助け手」をえた男女は、「こういう女と結ばれ、二人は一体となる。」人間が結ぶ絆のなかでもっとも強固なものは親子の絆(血の絆)であろう。その父母からさえ離れて互いが新しい生命共同体として自分たちの歩みを始める道を開く。「一体」とは、雨宮師によれば、「ひとついのちを生きるもの」という意味だということ。夫婦の交わりだけではな

い。生活も責任も悲しみも喜びもすべてを含めて共に生きる者、それが夫婦という共同体である。おそろく、世の中にこれに匹敵する絆で結ばれた共同体は、他に例を見ない。だからこそその中から新たな命が生まれ

てくるのが最も相応しい。「二人とも裸であったが、恥ずかしがりしなかつた」とはその夫婦の関わり

の深い信頼関係を示唆している。人は、それが弱点であれ、それが強みであれ、そのままに人に曝すことに気後れを覚える部分、つまりは弱点を保護するし、覆い隠す。時にはかえって飾り立てることもある。自分を飾ることなく、ありのままの姿で素直に生きることができるとは、自分一人であるときか、全く何の不安も懸念もいらぬ人々の間でだけであろう。「裸であったが、恥ずかしがらない」とは、したがって、このう

えもない安心と信頼のうちに、ありのままの自分で生きることができるとは、神はご自分の似姿として造られた人間が、同時に他の人間存在との関わりの中に生きる者であることを望まれた。聖書はその原形をここに述べているのである。

「カトリック児童福祉の日」は、子どもたちが使徒職に目覚め、思いやりのある人間に成長することを願って制定されました。この日はまず第一に、子どもたちが自分たちの幸せだけでなく世界中の子どもたちの幸せを願う、そのために祈り、犠牲や献金をささげます。毎日のおやつや買いたいものを我慢して貯めた子どもたち自身のお小遣いの中から献金することが勧められています。日本では、各教会だけでなく、カトリック系の幼稚園や保育園の大勢の子どもたちがこの日の献金に協力しています。

世界平和の日(一月一日)
教皇パウロ六世は一九六八年一月一日、ベトナム戦争が激化する中、平和のために特別な祈りをささげるよう呼びかけました。それ以来、全世界のカトリック教会は毎年一月一日を「世界平和の日」とし戦争や分裂、憎しみや飢餓のない平和な世界が来るように祈っています。平和はキリストの福音そのものに深く根ざしています。キリスト者にとって平和を唱えることは、キリストを告げ知らせることにほかなりません。新年にあたって「信仰の原点に立ち戻り、すべての善意ある人々と手をたずさえて、平和な世界の実現に向かって、カトリック信者としての責任を果たしていく」(日本司教団「平和への決意」)ことができるよう決意を新たにしたいと思います。

この日の献金は全世界からローマ教皇庁に送られ、世界各地の恵まれない子どもたちのために使われます。

<KABAYAN SEKSIYON>
"ANG SAKRAMENTO NG PAGPAPARI"
 Ang pag-anim na sakramento na pag-uusapan natin ay ang tungkol sa "Sakramento ng Pagpapari". Ito ang sakramento na kung saan ay ipinagkatiwala ni Kristo sa kanyang mga alagad na ipagpatuloy ang misyon sa pamamagitan ng simbahan hanggang sa katapusan ng panahon. Ang sakramentong ito ay may tatlong hakbang: episkopado(obispo), presbiterato(pari), at ang diakonato. Sino ang pwedeng pagkalooban ng sakramentong ito? Si Kristo mismo ang nagpili sa mga alagad at ibinigay sa kanila ang pakikiisa sa kanyang misyon at kapangyarihan. Itin aas siya sa kanang-kamay ng Ama, at hindi niya pinababayaan ang kanyang kawan, kundi palagi niya ng pinangalangagaan sa pamamagitan ng mga alagad at pinapatnubayan ng parehong pastor na nagpapatuloy ng kanyang gawa hanggang sa ngayon. Si Kristo ay patuloy ng gumaganap sa pamamagitan ng mga obispo. Yayamang ang sakramento ng pagpapari ay sakramento ng ministro apostoliko na ang mga obispo ay ang kapalit ng mga apostoles na ibigay ang mga "handog ng Espiritu", ang linya ng pagiging alagad. Sino ang pwedeng tumanggap ng sakramentong ito? Ang pwedeng tumanggap ng sakramentong ito ang "tanging binyag na lalaki", na may bisang tumanggap ng pagkapari. Pumili ng mga lalaki ang Panginoon Jesus para bumuo sa samahan ng 12 alagad, at ganoon din ang ginawa ng mga alagad na nagpili ng mga lalaki para pumalit sa kanilang misyon. Kaya ang simbahan ay kinikilala ang bagay na ito. Ang Panginoon mismo ang nagpili. Kaya sa rason na ito, ang mga babae ay hindi pwedeng magpari. Walang sinumang may karapatan ang tumanggap ng sakramentong ito o walang sinumang aangkin ng opisyon ng Diyos. Ang sinumang naka karamdan ng tanda ng tawag ng Diyos, kailangan ay pumasailalim sa kapangyarihan ng Simbahan. Gaya ng ibang sakramento, itoy handog din na galing sa Diyos. Ang pari tinawag na maglingkod sa Diyos at sa sambayanan. Hanggang sa muli.

Fr. Dino A. Orolfo
 tel/fax 09972-2-0423
 keitai: 090-2085-1094

1月

神のみ旨にかなう一年を過ごさせますように。

「十字架の使徒会祈りの意向」 司祭の召命

- 1日(主) 神の母聖マリア・世界平和の日
- 2日(日) 主の公現
- 4日(火) ルカ・デジャック神父命日(一九九八年)
- 9日(日) 主の洗礼
- 11日(火) 教区司祭会・教区本部・16時
- 14日(金) 永島泰蔵神父命日(二〇〇二年)
- 16日(日) 年間第二主日
- 18日(火) キリスト教一致祈禱週間(25日まで)

「すべての人を一つにしてください」という最後の晩さんでのイエスの祈りに耳を傾けるわたしたちはまた、折にふれて目に見える一致を示すように求められています。それは、ともに祈り、支え合うことによって、神がすべての人の救いのためにイエスを遣わしたことを「世が信じる」ためです(ヨハネ17・21以下参照)。

キリスト教諸教会の間で毎年一月十八日から二十五日に定められている一致祈禱週間は、このことを強く意識する機会となるでしょう。この一致祈禱週間のために、教皇庁キリスト教一致推進評議会と世界教会協議会は一九六八年以来、毎年テーマを決め、「礼拝式文」と「八日間のための聖書と祈り」を作成しています。日本ではカトリック中央協議会と日本キリスト教協議会が共同で翻訳し、小冊子を発行しています。

- 19日(水) ロタール・ハイシク神父命日(一九九九年)
- 23日(日) 年間第三主日
- 24日(月) 司祭評議会総会
- 25日(火) 教区司祭大会・27日まで・奄美大島
- 30日(日) 年間第四主日

2月

- 1日(火) 大勝献堂記念日(一九六二年)
- 2日(水) 主の奉獻
- 5日(土) 日本二十六聖人殉教者
- 9日(水) 灰の水曜日(大斎・小斎) 四旬節愛の献金

小教区活動の重要拠点 聖母幼稚園の五十周年祝う

— 鴨池教会 —

小教区付属の幼稚園は、全人的人間教育の基礎を築くカトリック幼児教育をもつて社会に貢献しようという目的とともに、その教育を通して教会の存在を地域社会に周知し、福音宣教につなげたいという宣教目的をもつて創立されるが、鴨池教会(主任司祭・泉浩二



合唱隊の練習風景

神父、信者数五百五十) 付属の聖母幼稚園(園長・田原章神父)もその例外ではない。聖母幼稚園の開設五十周年を迎えて、鴨池教会も今、その祝いに積極的にかかわっている。

聖母幼稚園は一九五五年(昭和三十年)、宗教法大カトリック鹿児島教区を設置者として創立され、その後、一九八五年(昭和六十一年)学校法人聖マリア学園に移管され、教育内容もモンテッソーリ教育法を取り入れて一段と充実してきた。その間、長崎純心聖母会のシスターたちの献身的

なりリーダーシップと教職員協力によって遺憾なくその真価を発揮し、地域社会の高い評価とともにカトリック幼稚園としてもまたその使命を十分に果たしている。田原章園長によれば、創立以来半世紀の間に幼稚園関係で入信した者は推定三百人に達するという。

キスタ桃蘭淳一郎さんの指導の下に「聖書に触れる集い」が始まり、また、一年半前から聖母幼稚園の保護者からなる合唱隊が創立され、今、十八人の合唱隊(内三人がカトリック信者)が五十周年記念に向けて毎週二回、グレゴリ聖歌の練習に励んでいる。聖歌隊員には聖書を配り、中には「カトリック教会の教え」

を買い求めていく人もいるという。また、在園児や卒園児が多数参加する教会学校やガールスカウトを通して洗礼に至る者も少なくない。聖母幼稚園では昨年十二月二十六日に記念講演会を行ったほか、来たる二月十一日に記念祝賀会を行う予定である。(問い合わせは聖母幼稚園〇九九―二五四―三五五)

子供に司祭職への憧れを

郡山神父が召命祈願ミサで説教

宣教地司祭育成の日の十二月五日(日)、カテドラルでは午後五時から召命のためのミサが糸水司教の司式でささげられ、八十人

余りの信者が参列した。危機状況にあるといわれる司祭・修道者の召命について、信者の認識を高めその増加のために祈ろうと教区の召命委員会が主催するこのミサがささげられるのは昨年に続いて二回目。昨年は現場の声を聞かせたいとの狙いから長崎カトリック神学院から山内実院長を招き説教をお願いした。

たかを紹介し、司祭職の素晴らしさ、大切さを信念をもつて子供に伝えるよう信者たちを励ました。参列者たちはユーモアの中にも強烈なメッセージの含まれる郡山神父の説教に、子育てのヒントを得たようだった。【四面に郡山神父の説教要旨掲載】

東京教区補佐司教に 幸田和生神父

教皇ヨハネ・パウロ二世は十一月二十九日、東京大司教区司祭ヤコブ幸田和

「短信」

生師を、同司教区補佐司教に任命すると発表した。幸田師は一九五五年三月生まれの四十九歳、東京都出身。二十一歳で受洗し東京カトリック神学院を経て一九八五年三月司祭に叙階された。その後、高円寺や高幡教会などで働いたほか、神学院の養成担当、教区本部宣教司牧部長など務めた。叙階式は二月十九日(土)午前十一時から東京カテドラルで岡田武夫東京大司教の司式式で行われる。

ザビエルの祝日

聖フランシスコ・ザビエルを記念する十二月三日(金)、この日を祭日としている鹿児島カテドラル(他の小教区では祝日)では教区の保護者ザビエルを称え、その取次ぎを願う式典とミサがあった。

信仰養成委員会

信仰養成委員会が十二月五日(日)教区本部で開かれ、既に実施された「04教区目標についてアンケート」の結果報告と各信徒団体や研修会等の報告とともに、今後の教区の信仰養成のあり方について話し合われた。委員会で糸水司教は、「信仰はいのちであり、単なる知識ではなく体験である。養成において神体験・キリスト体験・教会体験をさせるという目的をはっきりさせなければ」と信仰養成の方針を示した。

ヨゼフ・ガンドルさん

カタリナ・ガンドル修道女(レデンプトール宣教師)の令兄ヨゼフさんが十二月三日、心筋梗塞のためドイツで帰天した。七十五歳だった。

ベルティツラ・ヴィゴロさん

鹿屋教会主任司祭ヴィゴロ・マルコ神父(ザベリ才宣教会)の母堂ベルティツラさんが十二月三日、イタリアで帰天した。七十歳だった。

白浜満神父招き 典礼研修会開催

教区主催の典礼研修会が、十一月二十三日(火)、カテドラルで行われた。テーマは、「ミサの神秘―イ

エスとともに祈り、生活をささげる喜び―」で、講師は、福岡サン・スルピス大神学院典礼学教授の白浜満(みつる)師。



「父と子と聖霊のみ名によつて」の「によつて」は、原語では「その支配下に入る」という意味があるなど、ふだん口にしていない言葉の意味やミサを構成する種々の祈りや動作は私たちの信仰を求め、また生活の中でキリストと一つになって信仰を生きていることを求めるものであることが説明され

た。説明が具体的に、講師自身の信仰体験がユーモラスに語られたこともあり、午前・午後合わせて四時間近くの講話も熱心に聞くことができた。最後はミサをささげて終了した。

主任司祭の活動の足場

司祭館の登記終わる

小宿教会

聖心の布教師妹会小宿修道院の閉鎖に伴い、教区に無償譲渡された旧修道院の建物は教区会計部で所有権移転登記の手続きが進められ、これが司祭館及び信徒会館として専らその本来の用に供されている建物であ

るといふことの証明を県知事から受けこのほど無事登記が終了した。小宿教会を活動の拠点とするこことなった同小教区では、現在、新小教区の運営や宣教活動に向けて新しい体制作りに取り組んで

いる。神原矩明(小宿小教区信徒)さんの報告によると、十一月二十一日には主日のミサ後に地域住民との交流と宣教活動の一環として小教区内の全教会が共同したバザーも行われた。この日は教会学校の子どもたちも自分たちのコーナーを設け、それぞれ友達を招待して教会で楽しいひと時を過ごした。

創立十周年を祝う

純心女子大学

カトリック大学として、薩摩川内市(旧川内市)に平成六年に開学した鹿児島純心女子大学(福井道子学長)が、創立十周年を迎え十一月二十六日記念のミサと祝賀会を行った。

聖母マリアを手本とするキリスト教ヒューマニズムに基づく全人教育を教育理念とする同校は、開学時、国際言語文化学部国際言語文化学科と看護学部看護学

科でスタートした。この十年間に学部名を国際人間学部と看護栄養学部に変更し、新たに子ども学科と健康栄養学科を開設するなど教育理念を基に時代のニーズにこたえるべく取り組んできた。

今年新たに人間科学研究科心理臨床学専攻の大学院も開設した。現在同大学には九人のカトリック信徒が通っており、カトリック学生の同好会「St. Mary's Heart」も先日発足したばかりである。祝賀式で祝辞を述べた

糸永真一司教は「大学がカトリックであるということ、カトリックの教えを理念として設置・運営されるだけでなく、カトリック教会の教えが学問的に体系化されたカトリック神学、つまり人間と世界の究極的かつ普遍的原理として講義されることを意味している」と述べた。

司祭の素晴らしさを伝えて！

召命祈願ミサでの郡山神父の説教要旨

私は七人兄弟の真ん中です。村会議員をしていた父には、選挙や何かのときに地元出身の国会議員さんや様々なお客様がよく来られました。社交的な父は、子供を紹介するのが好きでした。父は私の番になると、必ず、私の頭に手を置き、お客様が信者であろうとながら、「この子は神様にささげて神父様になりたい」と言っていました。私もまるで暗示にでもかかったように「僕は神父様になるんだ」と思うようになりまし。一方、母は「世界で一番偉いのは神父様。その次がお医者様」が口癖でした。高校に進学後は大学進学の流れに乗り「司祭になる」ことは口にしなかった。



郡山神父

そんな私には、やはり父母の影響が大きかったと思います。特に「神父様が一番。勉強が一番でも、神様を信じていない人はかわいそう」との母の言葉は信念のように揺るぎないものでした。

皆さんはいかがでしょうか。司祭の孤独さ、大変さばかりを話題にし、子供にもそのように伝えていませんか。もし皆さんの子供や孫が「神学校に行きたい」と言ったら、まず「大変なことになった」と思いませんか。そうではなく「よく決心した。父さんも母さんも一生懸命頑張る」と言っ

て欲しいと思います。「神様は信者にはなくてはならない方で、素晴らしいお仕事なんだ」ということを伝えて欲しいのです。召命のためのお祈りは「誰かが司祭になればいいな」といつて祈るのではなく、いつでも「ハイ」と言って差し出す覚悟を持ってなされなければなりません。そういう意味で、召命の問題は皆さんの信仰の質の問題であることを心に留めて欲しいと思います。

聖体礼拝へのお誘い

谷山教会

谷山教会では、毎週木曜日の朝、ミサ後(七時)にご聖体を祭壇上に顕示して聖体礼拝をすることになりました。初日となった十二月二日には二十五人の信者さんが来て下さり、ご聖体の形をとられてお祈りをするキリストと心を通わせ祈りをささげました。



紹介

ミシェル・クリスチャン著
「キリスト教の2000年」
オリエンズ宗教研究所

わたしたちの使命である神の国の建設を堅実に

文芸

短歌

祈れずに迷子になりし心地してみこころ遠く思わゆる日よ
(評) 迷子の心地しながら、信仰も歌の道も深まっていくもの。
古仁屋 豊島忠司
野萱草の花を見むとて玻璃越しに猫と目が合うこの夕間暮れ
出水 遠竹睦郎
ふるりの箱崎神社の秋祭天草四郎

の舞踊で開く

阿久根 中津濱フサエ

キリストの愛に倣いて朝のミサすがしき恵みうけてやすらぐ
名瀬 林 明子

しゃしんにとった絵みたい一村の努力は愛よ良心の色
鹿兒島 春山マリ子
遠い空雲雀鳴く声愛の歌広々と舞い高く響かむ
鹿兒島 前田儀子

細胞に食ひ込む癌を思ひつつ眠れぬ夜の雨は激しき
雪起し里山に哭く風の声

俳句

あんな事こんな事あり年暮るる
鹿兒島 徳永ノブ子

人生を詠み得た佳作
出水 遠竹睦郎

山茶花の街路樹咲きて冬来たる
鹿兒島 春山マリ子
新年や神の光が常に照る
鹿兒島 本城 愛

汐寄する渚に千の浜千鳥
鹿兒島 龍門司真人

女性信徒の会親睦会

十一月二十四日、三十五人の会員がバスで大口明光学園を訪問しました。学園では大口教会のレヒナ神父さまによるみことばの祭儀にあずかり、またカノッサ会のシスターの方の温かいもてなしを受けました。



ザビエル様の艱歩道 新たな出発の時

新しい年を迎えて、晴れ晴れとした気持ちでいますか？ 以前の失敗を思い出して苦笑い(?)しながらも、新しい出発というのはいやっぱり気持ちいいものですね。



先日、冬らしからぬ暖かな昼下がり、仕事に帰る前に立ち寄り滞在した場所です。城址は小高い山の上にあり、地味に残っていたけど、生い茂った木々の隙間から遠くの風景が望めました。「ザビエル様は、ここを出て京都に向かうとき、鹿兒島での苦難を思いながら「んどうな〜」って私は仕事も忘れて浸っていました。

その後京都についたザビエル様ですが、結局ミカドにも会えず、荒れ果てた京都では宣教もできず、大学だと思っていた比叡山にもいけず、京都を去り山口に戻ったのです。でもそこは前向きなザビエル様！ 宣教計画の練り直しと新たな出発だっただけです。山口に向けて堺を出発したのは一五五一年の一月のことでした。



うため過去から学ぼうという姿勢で、二千年の教会の歴史が二百頁にわかりやすくまとめられている。迫害から国教化へ、東方教会との分裂、イスラム世界との対立、宗教改革、フランス革命、第

二バチカン公会議：教会史における重要な出来事の原因やその影響、意義などが、簡潔に説明されている。また、「ミサ」と「宣教」というテーマでそれぞれの歴史を概観している。現代の新しい宗教現象で、問題性が指摘されている「ニューエイジ」についても十頁を割いてキリスト教との違いを説明している(税別千二百円)。

みんなで青年をWYDへ送り出そう！

昨年十一月に開かれた教区評議会にて「青年たちをワールドユースデーに送り出そう！」という提案が出されました。集まった信徒、

司祭、修道者の皆さんが一緒に若者の教会での活躍を期待していることの表れだと思えます。もちろん、教会に所属する皆さんの願いでもあると思います。

現在、教区の青少年担当でも、青年たちへどのように支援していけるか検討中です。でも、一番効果的

が必要不可欠なことは、小教区の皆さんによる、身近にいる青年への直接的な働きかけです。皆さんが「本当に若者たちの力が教会に必要なんだ！」と訴え、隣にいる青年に実際に働きかける具体的な行動が大切なのです。

鹿兒島教区としてもワールドユースデーに青年を送り出せるように取り組んでいきます。ですから、小教区でもより一層青年たちに働きかけて下さい。それぞれが出来ることでいいです。霊的・経済的な支援も含めてお願いいたします。

小教区は教区の生きた細胞と言われます。小教区がより効果的に生きてこそ、教区も活きる事ができるのです。

週刊カトリック新聞

へえ、日本の教会は今こうなんだ・・・
ザビエル

カトリック新聞は、日本のカトリック教会唯一の週刊全国紙です。全国、海外の購読者様のお手元へ毎週直送いたします。また、全国のサンパウロ・女子パウロ会書店でも販売しております。

1部本体価格 150円 (税・送料別)
購読料金 (前納、税・送料込)
半年 4740円・1年 9480円

見本紙贈呈いたします

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館 5階 カトリック新聞社
TEL 03-5632-4432 FAX 03-5632-7030 Email kodoku@cwjpn.com